

自分の表現を持つこと 倉橋羊村

類句類想は、特に短詩型の俳句では陥ることが多いので、よほど注意する必要がある。

第一のケースとしては、観念を操作して作る場合で、人間の考えることだから、よほど独自の発想を心がけないと、偶然に似てしまうことが多い。

たとえば、

曼珠沙華不思議は茎のみどりかな 長谷川双魚
醒めてゐるさみどりの芯曼珠沙華 山下 洋子
あをあをと蕾の立ちし曼珠沙華 林 菊枝

は、類句ではないが、花とみどりの茎、芯、蕾などの色の対比がそれぞれ描かれている。

三句とも、色は副次的な発想とはいえ、そこにも効果のポイントを置いている点では、偶然の一致といってよい。繰り返すが、これは類句ではないことを、念をおしておく。

散るまでの花の情に溺れける 中村 苑子
花の雨わが身ひとつに溺れあて 文挾夫佐恵

これも類句ではないが、「溺れる」という心の傾向を詠んだものとしては、副次的な面で共通するところがある。

キー・ワードとはなっていないから、類想に陥るおそれはないが、言葉の使い方の上で順逆の形をとりにくい

ため、「溺れる」本意はなぞられやすい。

第二のケースとしては、吟行句が似るおそれのあることだ。同じ景を複数の作者が見て詠むのだから、参加者が多ければ、類句類想が生まれても不思議ではない。

それだけに、スケッチ程度の句を出しあうと、その場に咲いていた花などを取り入れて、よく似た句が出がちである。

第三のケースとしては、生老病死や恋愛、心の悩みな

どを詠んだ句に、類想の生じやすいことである。

例えば、母恋いの句などは、甘くなると同じパターンに陥ることが多い。望郷なども同様である。これなど、思うことがほぼ似たり寄ったりなので、よほど発想段階で留意しないと、表現内容が似てしまうのだ。

母の死を悼み、配偶者を亡った悲しみなども、類型化しやすい。情に溺れることも、やむを得ない面もあるが、手放しに表現すると身内のことだけに、読者の心を打つことは却ってむずかしい。

試みに三つのケースに分けて見たが、要は常識の線を出ないと、誰もが考えつき、ありきたりの喜怒哀楽の表現にとどまってしまうので、読者の感動を呼ぶに至らないことである。小説の世界でも、かつて大衆文学と呼ばれたものには、ありきたりの人生的感慨でお茶を濁すパターンが多かった。自然描写も型の如く、人情描写も娯楽の域を出ない。

俳句では、子規の排除した「月並み俳句」が新味に欠けていたのは、類型化した間に合わせ表現に終始していたからである。仲間同士の楽屋落ちに終わっては、いくら手だれになっても文学の世界からは遠い。

しかし、それだけに類句類想から脱することは、意外にむずかしいのだ。

いくつかの方法を挙げてみよう。

まず、自己の文体を持つこと。仮に発想が似ていても、その人なりのユニークな表現をすると、類句とはいえなくなる。

小径てふ情をいくすぢ山眠る 坂巻 純子
作者の代表句でも何でもないが、冬山の登り口はいくつも見える——という平面描写に終わっていない。作者なりの表現で、作者の文体で読ませてくれる一句といえる。

従って、次に、何よりも文学であること。

肥後盆唄聞くも歌ふも眼つぶりて 能村登四郎
肥後盆唄に引き込まれて、目をつぶりながら聞き、かつ唄う姿が、簡潔に描かれている。

一種の陶酔境には違いないが、押しつけがない。作者の醒めた目は意識されても、邪魔にならない。作者も充分、その境地を楽しんでいるから、目障りではないのだ。

こういう呼吸を身につけると、読者との間合いが適切に取れて、類句類想を心配せずにすむのである。それも技倆の内といえよう。

文学の志が高ければ、可能なことである。